※キッシュの手紙

施錠された部屋の奥には小さなキャビネットがあり、ホコリを被った小さな便せんが入っていた。
その中にある古い手紙には短い文章がつづられていた。

1968.10　親愛なるジャックへ

もう長くはないと感じている。
若いころの業の深さが祟ったのだろう。人生に悔いなど無い。

だが娘のローザに昔の組織の手が掛かるとも限らぬ。それだけが心配だ。

ジャックよ、どうかローザを護ってやって欲しい。今となっては信頼できる人間はお前だけだ。

キッシュ=ブロード

さらに便せんの奥には一枚の紙が入っていた。

親愛なるキャサリン=ブロードへ

この手紙が貴女の手に渡る時、既に私はこの世には居ないのであろう。
貴女がこのホテルへ来た時、私は運命というものを感じたよ。貴女は私の事をとても恨んでいるだろうか。もしかしたら、私の人生が幕を閉じるのは貴女自身の手によってかもしれない。

そうだとすれば、貴方が罪の意識を感じる必要はない。その時私は、ようやく解放されるのだから。

しかし恐ろしいのはそうでなかった場合だ。

はるか昔、私はローマで貴女の祖父・キッシュと共にある組織に属していた。
彼はとても勇敢で人望も厚く、たちまち組織の幹部となった。しかし若かりし頃の私は血気盛んで、ひとつの過ちを犯した。私のあやまちは道徳的には許されるものではなかったが、彼は私をかばい厚生の道を照らしてくれたのだ。

おかげで彼も私も組織を抜ける事になったが、彼への忠義は生涯尽くすと誓った。

以降このホテルを2人で設立し、私は彼を支えてきたが、彼の死後は娘…つまり貴女の母親のローザにその綱を預ける事にした。

しかし彼女は昔の組織の手によって消されてしまった。
私は自らの過ちを悔やみ嘆いた。

なぜ、彼女を護れなかったのか。　なぜ彼女の家族を護れなかったのか。

組織・ノース・カポファミリーは、昔のけじめを忘れてはいなかった。キッシュ亡きあと必ず彼の財産を狙ってくるであろう。

貴女と…貴女の姉妹は、私から遠ざけなければならなかった。
許して欲しいとは言わないが、せめてキッシュの作ったこの場所だけは護らなければならない。

私にはもう頼れる身寄りは無いが、デッド＝ダーティーという男を訪ねよ。
彼は私の敵のひとりだが、もっとも信頼できる男だ。きっと力になるだろう。

ジャック＝バイセン

それは、ジャックからキャシーに当てた遺書のようであった。